



公益財団法人 浦上食品・食文化振興財団 URAKAMI FOUNDATION

NEWS 2011

CONTENTS



- 理事長挨拶
- 学術研究助成事業
- 近年助成した研究からご紹介



- 食文化の振興・啓発および協賛活動
 - ・第10回カレー再発見フォーラムに協力
 - ・カレーアクション事業を後援
 - ・フードピア金沢を支援
 - ・読売写真ニュースを学校に寄贈
 - ・広報活動



- 事務局より
 - ・浦上財団は公益認定を取得しました
 - ・お知らせ

理事長挨拶

2011年という年は100年に一度という3月11日の東日本大震災があり日本歴史に残る年になりました。また台風による被害、タイの日本企業数百社に被害を及ぼした水害、どうにも止まらない円高傾向など、いろいろな場面で日本は試練を受けています。

しかし大震災の中で人々が発揮した譲り合いの心、また献身的な自衛隊・警察官の活動は世界中の尊敬を集めました。私の周囲でも石巻、気仙沼などでボランティア活動をしています。日本人の助け合いの精神はまだまだ健在と嬉しく思います。

日頃から皆様にご支援いただいている当財団も本年5月新制度での認定を受け、晴れて公益財団法人 浦上食品・食文化振興財団になりました。本当にありがとうございました。新しい財団は定款も新しくなりました。これまでは助成を「本邦における研究活動」に対して行うとあり、日本国内に限定していましたがそれを取り去り、海外での活動にも助成することができるようになりました。

昨年タイ・ラオスの視察旅行に参加して学校給食の大切さをより強く実感しました。タイの小学校では生徒一人一人が自分で育てている野菜菜園、ナマズの養殖、猪豚の養育、キノコの栽培から現金収入を得て給食を実践していました。それに比べラオスの小学校では昼食は家に帰るため、家の用事をして午後は学校に来られない生徒が多いそうです。戦後の日本の小学校でもアメリカからの脱脂粉乳の給食により子供の体格が一段と良くなりました。タイとラオスの子供たちの学力、体格に差があるのは給食の有無によるところが大きいと思いました。私が理事をしている一般財団法人民際センターは子供たちの就学の夢をかなえるダルニー奨学金や建築家加藤氏による学校建設プロジェクトなどで既にラオスでの活動の実績がございますが、当財団と民際センターが共同で給食実施のプロジェクトができるよう準備を始めております。

おかげさまで浦上財団も年々活動を大きく成長させています。どうぞ今後ともよろしくご指導、ご支援賜りますようお願い申し上げます。



理事長(右)；
学術研究助成贈呈式にて

主な活動紹介

学術研究助成事業

当財団は設立以来、食品と健康、食品の安全性、香辛料食品等に関する5つの分野を掲げ、ホームページや研究機関へはがき等で広く応募者を募り、国公立の大学・研究所等に対して研究助成事業を行っております。研究テーマ1件当たり3百万円を限度とする助成額は研究者にとってはまとまった研究ができる魅力ある額のようにです。

今年度は6月1日から7月10日の申請期間に214件の応募を受付けました。9月初旬、学識経験者で構成される選考委員会で厳正な審査を経て16名の研究者への助成を決定しました。

贈呈式は10月3日にホテルニューオータニにて研究代表者の方々、当財団役員、選考委員等が出席して行われました。浦上理事長挨拶に続いて伏木選考委員会議長から食品の発展やご自身の研

究への意気込みや気迫が伝わる方を選考したとの経緯を報告するとともに出席された15名の研究者の皆さんの研究を応援・鼓舞する話がありました。厳粛な贈呈目録授与式と和やかな雰囲気の懇親会を通じて参加者同士の研究内容の紹介や活発な意見交換が行われ、有意義なひと時となりました。

おかげさまで当財団設立から第26回までの助成件数は273件、助成金総額は7億2千4百万円弱となりました。

助成した研究の成果は、浦上財団研究報告書としてまとめられ、これまで18号まで発刊されています。今年度も19号を発行いたします。今までの研究の一例を3ページに掲げました。ご一読ください。



選考結果を述べる伏木選考委員会議長（右）と理事長（左）



研究内容を簡潔に発表する研究者



懇親会にて

～近年助成した研究からご紹介～

当財団が助成している研究の多くは一般市民にはとても専門的で難しく普通の人には敷居が高く感じられますが、健康や安全など私たちにもかかわってくるものも多くあります。そこで、平成21年度研究助成を受けられた福田先生に研究の成果を解りやすく書き下ろしていただきました。なお、福田先生は先の阪神・淡路大震災とこの度の東日本大震災に遭遇するという希有な経験をされており、今回も研究室が被災し、ご苦労なされたそうです。

先生は最先端のiPS細胞を今や日本人の3人に1人は罹るがんの治療に使うための研究をなさいました。iPS細胞は2006年に京都大学の山中伸弥教授によって誕生した神経や臓器、筋肉などいろいろな体の部分になることができる細胞です。自分の体細胞から臓器などを作れば拒絶反応を回避できるため細胞移植治療などの再生医療や病気の原因の解明、新しい薬の開発への活用が期待されています。

平成21(2009)年研究助成

「iPS細胞を用いた食品由来の脱メチル化化合物探索システムの開発」

東北大学 大学院農学研究科 准教授 福田 智 一



近年、様々な食品由来の機能性物質が注目を浴びています。一例では赤ワインやピーナッツの皮に多く含まれるレスベラトロール（事務局注：ポリフェノールの一種）は寿命の延長、抗炎症、抗腫瘍効果があるといわれています。このように食品中には様々な生物活性を持つ天然化合物が豊富に存在すると考えられますが効率的に機能をアッセイ（同：検出）する方法がないために、様々な活性物質を見いだすことが難しくなっています。

一方、最近では悪性腫瘍に対して抗腫瘍効果を持つ物質が報告されています。脱メチル化剤と呼ばれており、我が国においても新規の治療薬となることが期待されています。我々は脱メチル化活性を持つ天然物を探索する実験系を樹立すれば、様々な食品から新たな物質を発見することに役立つのではないかと考えました。その材料として我々はがん細胞と様々な共通点が指摘されている人工多能性幹細胞（iPS細胞）を利用することを発想しました。

といった研究を発想し始めたのですが、困難の連続でした。私は遺伝子組み換えには結構、自信があったのですが、まず、iPS細胞はそう簡単に樹立できるものではありませんでした。文献に書かれていないようなノウハウがたくさんあり、積み上げが必要です。山中伸弥先生がノーベル賞候補になるのも納得しました。加えて3月11日の東北・東日本大震災です。苦勞して樹立したiPS細胞は2週間の停電で保存中に全て死滅することとなりました。iPS細胞だけでなく、多くの研究資産を失いました。震災の直後、すべてを投げ出したい気持ちになった時もありました。しかし陸前高田や名取で愛する家族を亡くされた方々から比べれば随分恵まれている、なくしたものよりあるものの数を数えようと自分に言い聞かせ、努力してきました。幸い今回の大震災では、私自身も私の家族も健康には差し障りはありませんでした。感謝です。その後、皆様のご支援もあり、大学で実験を再開できるようになっています。9月にはもう一度、iPS細胞の第一号を再度、樹立した次第です。ちょっと変わり種の発想の研究ですが、粘り強く諦めなければ道は開けると考えて日夜努力しています。皆様のご指導とご鞭撻、ご支援をお願い申し上げます。

（この研究は研究報告書 Vol.19 に掲載される予定です。）

食文化の振興・啓発および協賛活動

■ 第10回カレー再発見フォーラムに協力

7月26日ホテルニューオータニで第10回カレー再発見フォーラムが行われました。カレー再発見フォーラムは、インドを故郷としながらも日本で独自の食文化を築いたカレーの文化や伝承などを科学的な分野で捉え直し、現代に適合したカレーの価値を再発見することを目的としてカレーと健康、カレーのおいしさの解明など毎回様々なテーマの講演を1999年から開始して今回が10回目になり、当財団も第1回より協力しております。

今回は『脳科学からみたカレーのチカラ』～国民食“カレー”は、脳に何を刻み、何を刺激しているのか～というテーマで脳科学者の茂木健一郎氏がインターネット調査とヒト実験をもとにお話ししてくださいました。

【内容】インターネットでの意識アンケート調査ではカレーを食べる頻度が高い人（2週間に2～3回以上）は頻度が低い人（3か月に2～3回以下）よりも物事に臨む際の効率性も集中力も高いと自覚している人が多いことがわかった。

また、成人男女12人が協力した「カレーもしくは比較のためのカレーからスパイスを抜いた煮込み料理（疑似カレー）の香りを嗅ぎ、一口食べてから一時的な記憶とその記憶を使った作業を組み合わせた認知課題をする」という実験では、カレーの香りを嗅いだり食べたりした時は疑似カレーの時よりも



カレーを食べた時の脳の活動について語る茂木氏

認知課題に取り組む前頭葉（大脳）の活動がより活性化しており、回答時間も早くなることが明らかになった。この回答時間の短縮を、制限時間中に何問解けたかの指標を作りIQに換算したところ、カレーを食べた時は疑似カレーを食べた時に比べIQが「7」上がっている、ということができる。

この実験結果はあくまでもカレーの効果の一部。現在、脳科学で注目されている「集合的知性」はチームとして協力してパフォーマンスを上げることがテーマであるが、例えば家族一緒にカレーを作って食べることで、みんなでおいしい、嬉しいといった感覚を持つことは集合的知性に良い影響を与えることが想像される。

■ カレーアクション事業を後援

Curry Action

昨年に引き続き今年も農業王国で地産地消に取り組んでいる北海道と九州（5月札幌市、6月福岡市）における「カレーアクション」に後援しました。カレーアクションは農林水産省による自給率向上キャンペーン「フードアクションニッポン」に協賛する事業で、自給率アップの5つのアクション①旬のものを

食べる②地元の食材を食べる地産地消③ご飯を中心に野菜たっぷりのバランスの良い食事④食べ残しを減らす⑤自給率向上の取組を知り、試し、応援する、のうち、①～④が無理なく達成でき、また1皿あたり69%と自給率として優等生のメニューであるカレーを通じて自給率向上に貢献しようという活動です。



【札幌会場】パネルディスカッション



基調講演をされる小泉武夫氏【福岡会場】



■ フードピア金沢を支援

日本海の海の幸が美味しくなる冬、毎年2月に金沢市を中心に石川県下で開催される食文化のイベント「フードピア金沢」に対して、第1回（1985年）より支援しています。石川県には冬の日本海の食材だけでなく、豊富な加賀野菜に恵まれた伝統の技と味が伝わる独自の食文化があります。



石川県中央公園でのフードピアランド。屋台が並ぶ。

普段訪れることが難しい一流料亭でお料理と著名人の話を楽しめる「食談」、石川の冬の味覚を味わえる囲炉裏村・屋台村などが楽しめる「フードピアランド」などが開催され、今年は料理と恋のお話のフードピアシアターが加わるなど進化しています。



フードピアランド内の囲炉裏村。屋台で買ってきた能登牡蠣や能登牛を炭火で焼いて食べることができる。

■ 読売写真ニュースを学校に寄贈

『「食」は「人」に「良」いこと、元気のもと』の標語をパネルに用い、「食育」に熱心に取り組んでいる小学校を軸に中学校、高校、図書館に教材資料として写真ニュースを提供しています。

＜学校からのお礼の手紙 一抜粋＞

- ・タイムリーなニュースから子供たちが興味を持ちそうな動物などの生態まで、多彩な内容に常に誰かが立ち止って見入っています。授業の中で使うことも多いです。
- ・記事が変わるたびに足を止め見入る子供たちの姿も多くあり、授業での話題にも取り入れられたりしております。
- ・図書館入り口横に置かせていただいていますので放課後などよく見えています。中には、レポートと一緒に提出したいと申し出る生徒もいます。
- ・子どもたち、保護者、教職員ともに毎週楽しみに拝見しております。学校にすっかり定着してあたり前のようになっていますが、貴財団のご厚意であることを忘れないようにしたいと思います。



広報活動

研究報告書の発行

3月に浦上財団研究報告書 Vol.18 を発行いたしました。こちらには去年の秋までに当財団に提出された17件の研究が収められております。入稿があと1週間遅ければ震災後のインク・紙・ガソリン不足の混乱で発行が遅れるところでしたが幸いなことに予定の期日に印刷所より納品いただき、全国の図書館に、東北地方にはガソリン供給や流通網が平常化するのを待ち順次お送りしました。また、昨年秋から今年の秋までに当財団に提出された研究報告を収めた研究報告書 Vol.19 を来年3月に発行する予定です。

財団リーフレットの配布、 財団ニュースの発行

より多くの方々に財団の事業活動や、寄付金の募集活動などを知っていただくためリーフレットを作成し、各種イベント会場で配布しております。また、写真を多く使ってその年の活動をまとめた財団ニュースを11月に発行しております。

財団HPの更新

<http://www.urakamizaidan.or.jp> のホームページを制作し、財団が行った活動を随時アップしております。このホームページでは、研究助成事業の申請書の入手（ダウンロード）や既発刊の浦上財団研究報告書（Vol.14以降）の閲覧にも供するなど多くの方々が訪問しております。

事務局より

浦上財団は公益認定を取得しました

理事長挨拶(1ページ目)にもありましたが、浦上財団は平成23年5月に移行認定を受けることができましたので、6月1日より公益財団法人 浦上食品・食文化振興財団と名称が変更になりました。今後、認定に相応しく公益事業になお一層努力していきたいと思いますので、引き続き皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

お知らせ

ご寄付くださった皆様が減税を受けることができる「特定公益増進法人」の資格はこれまで申請して認可を受けておりましたが、公益認定によって自動的に付与されることになりました。従いましてこれまで同様に、寄付された方々にお送りしている寄付領収書を所得税の確定申告に添付することにより所得税(国税)の減税を受けることができます。

また、浦上財団は東京都条例により個人都民税の寄附控除が受けられる団体として指定されております。当財団にご寄付をいただいた方々で都内にお住まいの方は確定申告時に上記所得税と合わせて住民税欄・都民税の寄附金控除の記載もどうぞお忘れなく(*^_^*)b

● 浦上財団の東日本大震災への取り組み

3月11日の地震では事務所のパーテーションが倒れたり書棚が開いてファイルが飛び出してきたりしましたが幸いなことに大きな被害はございませんでした。当財団は緊急性の高い食糧援助の観点より国連WFP協会による「東日本大震災救援募金」と、実際に現地でボランティア活動をする団体へ資金援助する公益法人協会「東日本大震災救援基金」に50万円ずつ3月中に寄付いたしました。その後WFPからは募金によっていち早い救援物資の物流拠点の設置、各国からの救援物資や国内企業からの食品・飲料の被災地への輸送、高カロリービスケットの提供をしたとの、また公益法人協会からは申請のあった団体に配分委員会の審査を経て4月中旬の第1回配分から10月下旬の第4回(最終回)配分までで1団体50万円を基本に合計2400万円強を50の団体に配分し活動を支えたとの報告がございました。

事務局スタッフも、ゴールデンウィークに東北でボランティア活動を行いました。森川は原発から25km辺りの南相馬市で8日間活動しました。地元の経済活動支援の思いを込め宿泊施設、コンビニ・スーパーを活用しました。活動としては、ボランティアセンターにおいて朝ヘドロ除去に向かうチームへの一輪車・角スコップ・ゴーグルなど備品の貸出しと夕方の引取り、日中は山積みされた道具の整備・修理、清掃に明け暮れました。写真清掃チームに再利用してもらうための使用済みタオル・軍手の洗濯では「排水に放射性物質が残っていて地域に迷惑にならないか?」と見えない敵の存在を心配しました。

浦上はピースポート災害ボランティアセンターによる石巻9日間の第6次派遣隊に加わり、ヘドロや瓦礫の仮集積

所になった街中の駐車場で、次々運び込まれてくるものをヘドロ / 不燃 / 可燃 / 危険ゴミの山に分別して積みなおしたり、処理場に運ぶゴミ収集車・トラックへ積み込んだりの作業を担当しました。土嚢袋に詰められたヘドロは非常に重いうえ、食料・カセットコンロ・寝袋とテント・活動装備一式などは東京から持参、郊外の休耕地でのテント生活、連休中の強風に低温と、大変で困難も多かったですがみんなで頑張り、担当エリアのヘドロを期間中に除去できました。

森川も浦上もそれぞれ地元の方のご厚意で短時間ながら津波被害に遭った海岸を見学する機会があり、涙が止まらない光景に言葉をなくしました。

また、今回3ページ目に寄稿くださった福田先生は、東北大学農学研究科に福島原子力発電所の災害関係で協力要請を受けて、手弁当で週に1-2回、ご自身の車で家畜保健所と共に20km圏内に入り、大型家畜(主にウシ)の屠殺・解体を行っているそうです。化学防護服とマスクをつけての作業は大変暑いそうですが、やせ衰えて、最期は食べられることもなく殺される動物たちを哀れに思いつつ供養の気持ちで参加されているとのことでした。

一日も早い復興を祈るばかりです。



作業時の装備をつけた浦上

〈お問い合わせは下記まで〉



公益財団法人 浦上食品・食文化振興財団

〒102-8560 東京都千代田区紀尾井町 6-3 ハウス食品東京本社ビル

電話: 050-3532-6365 (変わりました) FAX: 03-3264-6188

E-Mail: main@urakamizaidan.or.jp URL: <http://www.urakamizaidan.or.jp>